

---

# ~ ランダム ~

志貴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ランダム」

### 【Zコード】

N3251D

### 【作者名】

志貴

### 【あらすじ】

高校生とは思えない鋭い「眼」を持つている主人公は、それのせいで孤独な人生まつしぐら。周りからはチンピラ以上ヤクザ以下として扱われ続ける、本人曰く普通な高校生。もう高校生活を諦めかけていた彼に喜劇、はたまた悲劇が訪れる。

## 主人公について

春と言つのは始まり季節なのだろう。

春一番と言われている生暖かい強風に振られながら、大股で自宅から学校に向かう。

向かい風にあるためか強風が顔にたたきつけられて、自然と眼を細める。

今日から高校一年生。と言つても、自分にとつてはあまり意味のことではない。

学校には友達の一人もいなればまともに話したことがある人さえもいない。

不祥事を起こしたとか、そんなことをなどをした覚えなど無いが兎に角みんな自分を避ける。

溜息を吐きながら無意識に前髪を引っ張り、目元を隠そうとする。  
川島魁人の癖だ。

魁人の悩みは目元にあつた。

悪いのだ。

視力が、ではなく。

目つきが。

ここ一年で男くさくなつて來た顔立ちは、絶世の美少年でもなれば、人間離れもしていない。まあ、一応は悪くないのでは?とか思つてゐる。

だが目つきがすこじぶる悪い。もつ、シャレにならない位にやばい。

釣り上がつて尖つてゐる。二白眼なのである。

しかも、遺伝的病氣で目の中の虹彩の機能が元々薄いため、晴れの目に無意識に目を細めてしまう癖がある。

ただでさえ二白眼だと言つのに、それがプラスされると、見事に殺人級の目つきの完成である。

そしてその目つきは魁人の意思とか関係なしに、目が合つた相手を一瞬で狼狽させるらしい。

・・・・・わかる。よくわかる。自分だつて集合写真の自分を見て「何この人？物凄く怖いんだけど・・・・・・・つて自分じやん」と物凄く落ち込んでしまつほどなのだから。

ついでに言えば、魁人は物凄く感情表現が乏しいので、年がら年中二十四時間果てしなく無表情に近いのだ。それが物凄く恐い。そして元來の性格でかなりの無口なのだ。そのせいで誤解を解くことも出来ず、それが妙に威圧感を放つてしまつてゐるかもしれない。だが、だからと言つて・・・・・。

「な、何だ川島、先生に反抗するのか！？だ、誰かつ、小泉先生を呼んでくれーーっ！」

違います。提出物を忘れたから謝りに来ただけなんです。マッスル体育教師なんて呼ばないでください。

「「「「「「」」」めんなさいいいつ。わざとじゃないんだ。あいつが押してきたからぶつかつてえええ！」

肩が触れたぐらいで誰が怒るのとこりのだ。

「川島君って、あっちの世界に体半分くらい踏み入れてるらしいよ」

あっちの世界って何だ？ 極道か？ やくざなのか。

確かに第一印象は見かけかもしれない。

だが、たったそれだけでそんな噂まで立つのはあまりにも酷いのではないか？

そんな事が毎日、常識として当然の様に起これば、誰だって嫌気がさして来るというものだ。

成績、だつて悪くない。いや、かなり水準の高い進学校で常に上位の成績を維持している自分は、むしろかなり良い部類に入るのではないか。運動だつて、今の一入暮らしになる前に住んでた所の近くの武道場に通つていたので、身体能力も良いはずだ。

稽古以外では、人を殴つたどころか口論をした覚えも無い。

要するに川島魁人と言う人間、は極々普通な少年でしかないのだ。

## 命令文

いつも通り、すれ違う人々に視線を逸らされながら、重々しい足取りで学校に着く。

そこまでは今まで通りだった。

しかし、学校では必要最低限以外のことは一言も、いや、もしかしたら必要最低限な事も一言も喋らない自分の靴箱に、突然ハートのシールで封がされている置手紙があつたら、訝しげにはいられない。

新手の嫌がらせか？いやいや、この学校で俺にそんな事をする勇気のある奴はいないだろう。

じゃあ果たし状？微妙だ。そんな内容が書いてある手紙がこんなにキュートであるはずが無い。

俺が勝手に見てる幻覚？頬を抓くつて見る。痛い。目を擦つて見る。ゴミが取れたみたいだ。

やつぱりラブレター？…………悲しい願望は止めておこう。

手紙の裏を見てみると、そこには倉元亞紀くらもとあきと書かれていた。はて、そんな名前の人とは俺の知り合いにはいないはずだ。もちろん聞いたことも無い。

きっと、学年が違うのか、クラスが違うのか、もしくは偽名だろう。中を見た方が早いと考えて、トイレでこつそり内容を拝見する。こんなに心拍数が上がったのは人生で初めてでないのだろうか。ハートのシールを丁寧にはがし、封を開ける。予想通りといふか当然と言ふか。そこには一枚の紙切れが入っていた。

それを手に取る。

ドクンドクンと心臓が高鳴る。

それを抑えるために一回深呼吸をする。

すー、ふー、すー、ふー。よしつ。

二つ折りにされた紙を開ける。そこには

# 『今日の放課後、体育館裏に来いつ！』

しかも十人中十人が「これは女子の字だ」と言えるほどの丸々として可愛らしい文字だったので、それが書かれている内容と見事にアンバランスだ。

ミスマッチで不気味だ。

率直に素直に端的にそんに思ひた

たので仕方が無いしやなしが、もはやこの学校でまともに自分と話を出来る人なんていないと言うのに、この手紙、何かの陰謀を感じだつてしまふがいいでは無いか。

待て待てそこ決断を早めなくてもいい そうもう一度深呼 吸だ。

すーふーすーふ。

これは女の子の字だ。まずそれは間違いない。

そこから考える結果は、  
「ノーレターではなし事は間違しない」  
き感を無にしてし。

報復。

え、  
でも何の？

自分の出した結論に疑問を覚えてしまった。

ちなみに言うが、俺は今まで一度も口論をしたことも無ければ、人様を殴ったなんて事もした覚えなど無い。

外見こそ恐がられているが、それに似合つよつた悪事は働いていない。

俺は無罪だ！！

断言してやる。

## 突発的な行動派

ワツツ！？

そう思つて不思議じやない衝撃が、俺のみぞに襲い掛かつた。

「か、はつ」

悶える。そして悶える。

まるで世界が一瞬にして夢の中に変わつてしまつたような、あまりにも現実を無視したくなる苦しみ。

一体俺が何をしたというのだ。

「あんたみたいな極悪人は百回死んだつてまだ足りないわーー！」

俺を殴つた張本人がなにやら叫んでいるが、正直苦しすぎて聞き取れない。

改めていよう。俺はこの十六年間、人様を殴つたことも無ければ口

論をした覚えさえないのだ。

そんな超平和主義者たるこの俺が、なぜ意味も分からず突然、鳩尾を殴られると言う体罰を甘んじなければならないのだ？

おかしい。おかし過ぎるぞ。

こんなおかしい状況になつたのは今から数分前。

約束通り放課後、教室から体育館裏に移動中。

いや、別に手紙だったから約束なんてしてないけど。

それどころか命令形だったからどっちかって言うと強制だろ？

宛先人不明の手紙に従つた俺に、吉が出るのか凶と出るか、はてさ

て疑問だね。

しかし、この学校で誰とも交流が皆無の俺に、誰が呼び出しなんてしたのだろう。

こっちは不安と少しの期待で鼓動が收まらないではないか。体育館裏という最も予測不可能なところで、俺に一体何が待ち受けているのか。

俺は思考を止めて歩きに専念する。

そして、体育館裏に到着。

そこには、一人の女子が立っていた。

物凄い不機嫌そうな顔で。

「・・・あ」

目が合った。

しかも、かなり睨んでいる。

「おそれいっ！　！」

いやいや、遅くない遅くない。

授業終わって即行でココにきましたよ。貴方が早すぎるとんです。と言う文句は心の中でだけにしておいた。

「えっと、手紙・・・くれた人？」

正直自信が無かつたので、小声で聞いてみた。

彼女の制服の胸の部分に青色の名表がぶら下がっているので、どうやら自分と同じ一年生のようだ。

だがおかしい。この少女は見たことが無い。自分で言つのもなんだが俺は記憶力が抜群にいい。一度見た顔も早々には忘れんはずだが。

「あんたが、川島魁人？」

相手も疑問系だ。

尚更おかしいぞ。俺と分かっていたから手紙をくれたんじゃなかつたのか？

もはやこの学校で俺のことを知らないのは新入生である一年ぐらいだぞ。一年になってまで知らないはずが無い。  
そういうえば、隣のクラスに転校生が来たとかクラスメイト達が話してた様な気が。

「そうだけど、君は誰ですか？」

そう聞いた瞬間。彼女から鋭い眼光が消え。無表情に近くなつた。  
そして、トコトコ、と俺に向かつて歩いてきて。

ドゴッ

俺に向かつて拳を突き出してきた。

其れがさつ起き起こつた出来事。

全く意味が分からん。あの会話にこの女の気に触るよつなことでもあつたのだろうか。

「けほ、けほ」

俺は咳き込みながら立ち上がる。

「初対面の人に暴力するなんて、ビビの国の挨拶だ？」

ドカッ

今度は膝の裏を蹴られた。

筋肉で守られていないのでかなり痛い。ついでにヒザカツクンされたみたいに、途端にバランスが崩れて膝が地面に付く。

「もう一度言つてみなさい。誰と誰が初対面ですつて？」

底冷えするような恐怖の声。

それは、不正解を答えたたら即刻抹殺してやると言つていいようだ。世の中はおかしい。俺の面なんかより物凄く恐いモノだつてあるじやんか。

「え、ええと。俺ときぐほつ！－！」

言い終わる前にまた蹴られた。

「あんたと私が初対面？はつ、白々しいとはこの事ね。私に行つた数々の恥辱、忘れたとは言わさないわよ－！」

そ、そんな馬鹿な。

俺は今まで十六年間。人様を殴つた事も・・・・・・以下省略。ついでに言つと、無口で、無愛想で、人に話しかける勇気の無い俺がそんな大それた事するはずがない。

そんな事、俺の自慢の海馬にだつて記録されて無いぞ。

「ちょ、待て、人違いだつ！もしくは誤解！－！」

俺は必死の説得を試みようとした。

だがそれは、目の前の女には無意味だったようだ。

「誤解？人違い？今更そんな言い逃れするなんて、たいした奴じやない。いいわ、口で引導を渡してあげる」

引導なんて渡されて溜まるか！

この女はおかしい。

きっと被害妄想か何かが、俺の面を見たことによって爆発してしまつたのだろう。

そんな巻き添えを食らつてたまるか。

俺は痛みで鈍くなつた身体に脚を入れ、身体を起き上がらせると早急にこの場を脱しようと後ろに走る。

「逃がすかっ……」

その女は逃げようとした俺の足に自分の爪先を引っ掛け、足払いをしてきた。

角度、タイミング共に絶妙であったが、俺も空手一一段の実力者。こけない様に素早くバランスを立て直す。だが、相手の方が一枚上手だった。

バランスを立て直すことに精一杯だった俺の後頭部に向かつて、容赦無い蹴りが跳んできた。

もちろん、そんなものを防ぐ暇など無いわけで、ゴシッ、と鈍い音を立てて直撃してしまつた。

「がつ

世界が回る回る回る回る。

世界が暗くなる暗くなる暗くなる。

世界が？？？？？？？？？？

「魁・・・バ・・・・・・・・い」

なにやら聞こえてきたが、今の俺にはそんな物を聞き取れる状況ではなかつた。

そして俺は、意識の狭間をさまよい続けた。

余談になるが、この光景を誰かに見られてしまっていたらしい。  
そのおかげで、俺は今よりもっと不幸になってしまった。

## またかよ

ガタンゴトン、と電車に揺られながら、学校を目指す。

腰掛に座り、前方の窓から移り変わつていく景色が目に映る。その空は灰色の重々しい雲が、空いっぱいに広がつていていつ雨が降つてもおかしくないほどだ。しかし、天気予報で今日の降水確率は10%と言つていたので、たぶん大丈夫であろう。

ガタンゴトン、と大きく電車が跳ねる。

通常なら今の時間は通勤通学のラッシュなので、誰かの肩に触れてしまつぐらいはあるだろう。だが、魁人の周りではそうは起こらなかつた。いやそれどころか、満員電車独特の息が詰まるような窮屈感、暑つ苦しい圧迫感すら魁人はまったく感じていなかつた。

居ないのだ。

人が。

魁人の周り半径二メートルぐらいにかけて。

明らかに距離を置かれている。

こつちでは空間が余りあるほどなのに、隣の車両ではギュウギュウの満員だ。

そんなにも恐がらなくてもいいだろ?と思つ。しかも何か、恨めしそうにこつち見てる人がいるし。

だったらこつちに来ればいいのに。同じ車両にいるだけで誰が何を

するというだろうか。

その人に視線を移したら、光速以上の速さで顔を逸らされた。

・・・・・別に、もう慣れたけどね。

所詮人間なんて見た目なんだ。そう思わないと人生なんてやつていけない。

自分はこの先ずっと、学校で友達の一人も作れずに卒業してしまうんだ。

誰とも関わらずに誤解も解けずに、不良以上のヤクザ予備軍として扱われるのだろう。

と、思っていた。

だと思っていたのに。

魁人の靴箱に、（今日の放課後、体育館裏で待っています）と書かれた手紙が入っていた。

「デジャビューだ！」「デジャビューを感じる！」

この前、といつても昨日と言う凄く最近だが、酷い目に合ってしまった自分は、もはや人間不信と疑心暗鬼、それと対人恐怖症に陥ってしまっているのだ。

もう、他人なんて信じられない・・・。

忘却の彼方に押し遣ろうとしていた記憶が復活してしまった。

昨日、意味も分からずいきなり殴りかかられた俺は、意識を失いそうになつたが、そこは何とか持ちこたえた。

そして、正気を取り戻したときには、俺を殴った確信犯は遠の昔に姿を消していたようだ。

確か名前は倉元亜紀と言ったかな？

今まで見たことも無い顔だったので、きっと隣のクラスにやつてきた転校生なのだろう。

このまま無視してしまっても構わなかつたが、それは俺の良心が許さない。

昨日の会話から、俺が彼女に何かしてしまったようなんだ。

俺自身にそんな記憶は無いが、相手がそうだと言つてるので原因を突き止めないといけない。

そうしないと俺も納得できない！！

今日の昼休みぐらいに、彼女と会おう。

俺は決意を新たに教室へと入つた。

## 負け組み候補！？

おかしい。

教室に入った俺は物凄い違和感に気が付いた。  
おかしい。

みんなが俺を見てる。そして何かこそこそ喋ってる。  
今までなんて、俺と田を会わす事も出来なかつたはずなのに、今日は  
はやけに視線を感じる。

何故だ？

俺は疑問符を頭いっぱいに浮かべながら席に付いた。  
目玉だけを動かして部屋を見渡してみる。

男女問わず俺に視線が入つていて。

何故だか居た堪れないのは気のせいでしょうか？

そう思つた唐突に、教室のドアが物凄い勢いで開けられた。  
バンッ、という音に俺は少し心拍数を上げた。  
そつちに視線を移すと、なにやら眼鏡を掛けた、いかにもインテリ  
っぽい奴が入つてきた。

そして歩いてくる。歩いてくる。

こつちに歩いてくる！？

俺は内心ビクビクだつたが、そこは生まれ付いての感情表現の乏しさで何とか冷静を装う。

今の俺は周りから見れば、こつちに向かってきた男をにらめ付けて  
いるのだろう。

それはそれで悲しい。

ピタッと、姿勢良く俺の目の前で眼鏡男が止まつた。  
やはり、俺に何らかの用があるのか。

「君が川島魁人君だね？」

婆形がインテリにほかにたら 口説もなんてインテリなのでしょか。

「ふつちやけ、肌が粟立つ。俺は緊張しながら答える。

「そ、  
だけど。  
あんたは？」

そう聞いた途端、その眼鏡男はいきなり鼻息を荒くして、眼鏡をくいつと持ち上げた。

「良くなぞ聞いてくれた！－」この私、周藤幸太は、すとうこうた、このつづるものです」

俺はそれを受け取る。

と言いながら、胸ポケットから一枚の紙切れを取り出した。

そこには

『負け組み愛好会 創立者兼会長兼議会長

周藤幸太

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•

「そう！！負け組み！！人生とは世界とは、いずれも必ず勝ち組と負け組みに分けられてしまうのだ！勝ち組は自分達がそうだと言つ自覚を持たず、悠々とその生活を送るが、負け組みは違う！－何時

ある他者を妬み、嫉妬し、劣等感に苛まれ続けているのだ！そんな負け組みたちを救うのがこの負け組み愛好会。自分よりも才能が無い同じ負け組みを集めて、その傷を薄め、癒し、友情

を作る。喜べ川島魁人！君はその素晴らしい愛好会に入団する権利を得たのだ！さあ、我々と一緒に負け犬となり、遠吠えでもしながら傷の舐め合いでもしようではないか！――」

言っていることの意味が分からぬ。負け組み？入団？何言つちやつてんのこいつ？

「・・・はい？」

「ふむ、現状を理解していないようだね。それも仕方が無い。こんな素敵なところに入ることが出来るのだ。混乱して当然だろ？いやいや、負け組みのどこが素敵なんだよ！逆に嫌じゃわ！もろ如何わしいしじやねえか。それに負け犬つて何だ負け犬つて。俺は一体何に負けたんだよ。

「説明しよう。昨日君はある女子生徒に体育館裏に呼び出されたね。実は愛好会組員の一人が早くもその情報をキャッチしていてね。君の後を付けたらしいんだ」

な、なんて奴らだ。どこでそんな情報を掴んだんだ。ていうか負け組み愛好会つてお前の他にも居たのかよ。

「そこで見たものは、女子生徒に鳩拳を食らい、膝裏と胸を蹴られ、逃げ出そうとした隙に後頭部に一撃を貰つたそつじやないか」

なんてこつた。こいつは事細かに昨日の事態の説明をしやがつた。改めて聞くとなんて恥ずかしいんだ。

すると、俺の耳に「やつぱり本当だつたんだ」という女子のヒソヒソ話が届いた。

やつぱりって、という事は学校中に知られてしまつているって事か。

「沈黙は肯定と取つても構わないね。そう、だからこそ君は選ばれた。君はその破壊力のある眼光によつて学校を牛耳つていたが、ある美少女転校生によつてその座から引き摺り下ろされ、負け犬とな

つた。その後の君は屈辱と恥辱、後悔と孤独が待っているだけだろう。しかし、我々がそつとさせない。君を負け犬と見込み、負け組み愛好会に招待しよう。

「うう、なるほど。別に牛耳っていたなんて事実は無いが、端から見たらそうだったのだろう。

そんな俺が、突如としてやつてきた転校生にココテンパンにやられた訳で、無様な姿を晒しているんだろう。

しかし、周りの視線からは、同情でもなければ哀れみでもなくて、むしろ嘲笑つてないか？

なんだか精神的に痛い。

ガタツ、と椅子を引いて立ち上がる。

「ああ、入団する気について、何所に行こうとしているのかね？」

俺は眼鏡男を無視して教室のドアを開ける。

「待ちたまえ！」

「便所だ。ついて来るな」

その後、ホームルームが始まつたにもかかわらず、俺はずっとトイレの個室に居た。

何してたかって？

泣いてたんだよ……

…………少しな。

悔しかつた。

悔しかつた悔しかつた悔しかつた。

あいつは私の事なんて覚えていなかつた。

手紙にはちゃんと名前が書いてあつたはずだ。

読んでいないという事も無い。

私はあいつの顔を見ただけで分かつたつていつのこ。  
あいつは全然。

ずっと前のあいつをそのまま成長させたような、自分のイメージ通りの外見だつた。

でもあいつは、名前を見たにも拘らず、全然私の事が解つていよいうだつた。

結局私だけだつたんだ。

あの事も、あの約束も、私の存在すらも、あいつは忘れてしまつたんだ。

そう思ひと、怒りよりも悔しさがこみ上げてきた。

今にも出そうになる涙をこらえて、下唇を噛む。

別に期待してたわけじやない。

アレからもう何年も経つてゐるのだ。忘れて当然だ。

そうだ、忘れて当然なのだ。

じゃあ、何でこんなにもムカつくな？  
やつぱり覚えてほしかつたのかな？

「倉元さん！」

「はっ、はい！」

急に私の名が呼ばれた。

驚いた私はちよつと声が裏返つた返事をしてしまつた。

「倉元さん本当なの！？」

「え、何が？」

いきなり本当も何も、話の筋が読めない。

「川島君の」とよ、川島君。倉元さんがのしゃしゃつたつて本当なの？」

う、そのことか。

確かに、あいつが私とは初対面だつて聞いたとき、ついカッとなつちゃつて、我ながら見事な蹴りをお見舞いしたんだつけ。  
それがこんなにも早く学校に広まるなんて、あいつ有名なのかしら？  
「『』は包み隠さず正直に答えるべきね。

「ええ、本当よ。自分でもやつ過ぎたつて思つてる。今度、あやま・  
・・・・・」

「すうひつひつひー！――い！――やつぱり本当だつたんだ！――！  
！」

私が答えたとたん。教室に居た生徒全員が男女問わらず一斉にうつむきに向かつてきた。

「あの川島君を！――勇氣ある～！」

「マジかよ。何か習つてんのか？で、いつかあいつつて強いのか？」

「強いつて言つよつ恐いのよ。あの日、絶対何人か殺してるつて――」

「噂じやあ一声掛けると、百人以上の族が集まるらしげ」

「氣をつけなよ倉元さん。ああいのは後からが性質が悪いんだか

「ひ

え、なに？何なの？？何の話？？？

「ごちやごちやと周りで喋られたら聴き難い。

あいつの事よね？

別にあいつを殴る事に勇気なんて必要ない。

族つて何？あんなへなちょこがそんな物と関係あるわけ無いじゃない。人も殴れない奴よ。

どうも、私の見解と周りの認識は全く別物みたいだ。いや、私はずっと前のあいつの事しか知らない。

人は変わるものだ。

アレから、あいつが周りが言つてている様な奴になつていたとしたら？そんなはずは無い。昨日のあいつからはそんな感じは全くしなかつた。昔と同じだつた。

でも・・・・・・・・・・。

ガラガラガラ。教室のドアが外から開けられた。

そのとたん、馬鹿みたいに騒いでいた教室が、まるで水を打つたよう静まり返つた。

そして、みんなの視線は一人の男に向けられている。

人を睨み殺すかのような鋭い眼。

苛立つているのか、下唇を噛んでいる。

少々伸びすぎている前髪。

噂をすれば何とやら。

「・・・倉元、亞紀・・・さん居ますか？」

丁度、噂の張本人が立つていた。

川島魁人。

私を忘れてしまった男。



## もうでなくちゅ

なんだ？なんなのだ一体。

昼休み。ちょっと昨日のことで、俺を殴った犯人こと倉元亞紀さん  
に話があつたので、隣のクラスに来たのだ。

俺が入つたとたんに、騒がしかつた教室が一気に静かになった。  
なぜだか心拍数が上がる。

しかも、お目当ての人物を中心に有象無象が集まつてゐるではない  
か。

それのみんなこいつら見てるし。

中には睨みつけている奴や哀れんだ視線を送つてくる奴が居る。

・・・・・逃げ出したい。

緊張しているせいか、無意識に下唇を噛んでいた。

口口まで来といてなんだが、この視線を回避できるなら後日に後回  
しでもしようかと考えてしまう。

だって仕方が無いではないか。

中学校卒業式前日に、卒業証書を貰う時に恥をかかないよう<sup>1</sup>こと、  
一人でこつそり練習して<sup>2</sup>いたこの俺が、こんな一人を集中攻撃して  
いるような視線を耐えれるはずが無い。

やつぱり今度にしようかな。

・・・いや、駄目だ駄目だ。何とか今日中に話をつけなければ…！

俺は最大限の勇気を振り絞つて、静まり返つた教室にこいつ言った。

「・・・倉元、亞紀・・・さん居ますか？」

・・・小声になつてしまつた。

仕方ないしゃないか。これが俺の最大限の勇気なんだ！！

「・・・いるわ」

俺が内心で悶えていると、凜とした綺麗な声が静まつた教室に響いた。

倉元亜紀が椅子から腰を上げてこっちに歩いてくる。

昨日見ただけでは解らなかつたが、結構整つた顔立ちをしている。美人の部類に入る。

スタイルもなかなかだ。昨日の蹴りといい、何か武術でもやつているのだろうか？

歩き方も綺麗だ。まるでエーテ・・・・・つて、何を考えているんだ俺は！？今はそんな時ではないだろうに…！

「で、何か御用かしら？」

「ツー？」

俺が妙なことを考えている間に、彼女は俺の目の前にいた。意識が思考の中にいた俺は、気づくのに数秒遅れてしまった。

「用があるんでしょ。早く言いなさいよ」

「ああ、昨日のことで、話しがある…」

俺は彼女の眼を見ながら言つ。

相手も俺の目を直視していた。

思えば、人と眼を合わせたまま会話をするなんて何年ぶりだろうか。みんな俺の眼を見ただけで狼狽するのだから、会話なんてする暇が無かつた。

だからなのだろう。自分を真っ直ぐに見てくれた彼女に、少し感動してしまつたのだ。

「話つてこなのは口口じや駄目な内容？なら外に出る？いい場所があるわ」

彼女は俺の返事など待たずにはしゃぐと歩いていく。  
そして俺もそれに付いていく様な形となってしまったので、どうち  
が呼び出したのか解らない。

まあとりあえず、彼女についていく事にした。

ପ୍ରକାଶକ

倉元重紀が俺に向いて振り返る。  
いや、口口つて言われても。

・・・・・昨日と回りじゃん

そう、昨日と同じ体育館裏。全てといつていいほど俺には不愉快な思い出しかない。

「ココの体育館裏つて結構いいわね。あまり人の目の少ないわよ、ここ」

では何故、俺の無様な姿が目撃されたのでしょうかね？

「そんなの偶然なんじゃない？ たまたまそこに居合わせただけよ」

彼女は今度こそは誰にも邪魔されずに、一人だけで話しが出来ると思っているみたいだ。

「で、本題に入るけど。話つて何?」

来た。

俺は昨日の事で思つ所があり、わざわざあの視線の中彼女を呼び出したのだ。

「君に、これだけは言つておく」

そう、これだけは言つておかなければならぬ。

今後の俺のためにも！

俺は意を決して言つてやる。

「申し訳ありませんでした！――

全身全靈で謝罪した。もちろん頭を下げている。

「アレからいいくら考へても君のことが思い出せなかつたんだ。しかし、君が嘘を付いているとは思えなかつたし。何より、昨日の蹴りには殺氣が籠つていた。明らかに俺を殺すつもりでの手加減の無い一撃だつた。それから考へられるのは俺が本当に君のことを忘れてしまつたとしか思えない。真に申し訳ない。思い出すよう全力で記憶を探るつもりだ。だからどうか許してほしい」

これが俺の正直な気持ちだつた。俺は今まで悪事なんて働いたつもりはないが、他人によつてはそう受け取つてもらえない場合がある。きっと彼女もそういう場合なのだろう。

俺は上目遣いに彼女を見た。

「え、は、へ？」

むむ、誠意が伝わらなかつたか。仕方が無い、最終手段だ。  
俺はその場に座り込み、襟を正す。俗に言ひ正座だ。

「すみませんでした。全身全靈を持つて思い出させて頂きますので、  
どうか許してください」

俺は手を地面につけて、額も地面に擦りつける。

俺だつてれつとしだ男だ。プライドだつてある。本當はこんな事  
はしたくはないが背に腹は変えられないのだ。

「ちょっと、もつ良いわよ。許してあげるから顔を上げてつてば」

俺の誠意が通じたのか、彼女から許しのお言葉を頂戴した。  
しかし、その言葉に何処か笑い声のよつた物が含まれているのは、  
俺の気のせいなのだろうか？

俺は脚に力を入れ、制服に付いた砂を払いながら立ち上がる。  
・・・・・彼女は、笑みを浮かべていた。

「やつぱりあんたは、そうでなくちや」

「は？」

「何でもないわ。何でも」

彼女は笑顔だ。

昨日のよつた鬼気迫る雰囲気はない。まるで別人のよつだ。  
今なら聞けるかもしね。

「あの・・・・俺は一体、君に何をしたのか聞いてもいいか?」

ずっと気になっていた事だ。

俺が何かを彼女にしてしまったことは確実かもしれないが、その、具体的に何をしたかを聞けば思い出すかも知れない。

俺の問い合わせて、彼女はこう答えた。

「え、そんなの私の口から言わす『気?』

・・・・・ま、まさか。俺は人には言えない様な事をしてしまったのか!?

俺は今まで外見がこれだった為、人々から恐がられ続けてきた。だから、だからこそ内面は誰よりも誠実になろうと心に決め、今まで努力してきたつもりだった。

そ、それが。

「そういうのは自分で思い出してこそ、誠意を見せるって事でしょ。頑張って思い出してもよね」

彼女の言葉は、今の俺には届いていなかった。

やつぱり、あいつは変わつていなかつた。

人を殺した？不良を束ねてる？あははは、そんなことがあいつに出来るわけがないじゃない。

ケラスのみんなにあいつの事を買しかぶりすぎてるのた  
あいつは人も簡単には殴れない、臆病者なのよ。

確かに眼は危ないけど、たつたそれだけじゃない。

何にも恐くない。

でも私を忘れていることは許せないわね。  
まあいいわ、忘れてしまったことは悪い出しでもらえばいい。

例えどんな手段を使ってでも、ね

それにしてキ おの三 座に炮等干 が たれ  
まるでプライドなんて言葉を知らないような、見事に無様な姿だつ  
たわ。

私は笑いを何とか堪えながら、教室に入つた。

「…………」

と同時に耳に響く歓声と拍手が沸き起つた。

え、何? 今度は何なの?

私はボカシと呆けたまま、その場に固まっていた。

はああつ。  
溜息が止まらない。

溜息をすると幸せが逃げていくというが、本来溜息とは憂鬱だからするものなのだ。

俺の場合、憂鬱イコール不幸だという事だから幸せが逃げていく前ではなく、幸せが逃げてから溜息が出るのだ。

はあつ、

溜息が止まらない。

「そんなに溜息ばかりしてると喜也が逃げるわ」

「うるさい。

もう逃げちまつたよ。

後の祭りなんだよ、

「ま、これから良い事があるわ」

いい事ってなんだよ。

そんな何の根拠もない事を言つたつて、全然慰めにならねんだよ。

・・・・・・・・?俺は一体誰と?

「いや、根拠ならあるわ。君は私が見込んだ負け組みなのだからな

!-!

「なに!-?」

俺の隣にはいつの間にか眼鏡男がいた。

ていうか、まだ諦めてなかつたのかこいつ・・・・・・!?

「さあ、改めて君を負け組み愛好会に招待しよう。どうだ? これ

以上のいい事はそうそうはないだろ?」

い、や、だ! -

負け組みなんて入った暁には、俺はきっと立ち直れなくなる。  
男としての何かが脆く崩れ去ってしまうだろう。

今でも危険な状態だということ、これ以上精神衛生面上よくないことをして堪るか！！

「拒否する」

俺は即行で断る。ついでに睨みを利かせる。

常人であるならこれで、俺に付き纏う事は無いだろう。  
無いはずだった。

「ふつふつふ。そんな恐い顔しても、今回はちびらないな  
ちびつたことあるんかい！！」

我ながら恐ろしいな。

ていうか、何気にこいつ余裕だな。  
しかもなんか、笑い方がキモイし。

「これを見たまえ！！これでもう君は、言い逃れは出来ないはずだ  
！！」

とか言いながら、眼鏡男は何かを俺に突き出してきた。

・・・・・写真？

俺はそれをまじまじと見る。

仁王立ちをしている女性と、無様なほどに地面に額をこすりつけて  
いる男の姿が・・・・・・・なに――――――――――――――――――

そこにはつい先ほどの、俺と倉元亜紀のワンシーンが映っていた。  
しかも人には絶対見せたくない場面だ。

ていうか現像早すぎだろつ！！



「と、そんなことがあったんだよ」

「俺は今日の一部始終を声に出して伝えた。

『あははは。それは災難だつたね』

電話越しに女子の笑い声が耳に響いてきた。  
俺はその返答に顔を滲らせる。

「笑い事じやない。あの後、なんか周りの視線が俺を哀れんでいた  
んだぞ。何故だか、物凄く虚しい気持ちになつた」

『ごめんごめん。でもさ、その女の子・・・えーと倉元さんだっけ  
? ホントに何も覚えてないの?』

「無い・・・はず。一時間記憶を巡らした結果では、俺には倉元と  
言ひ知り合いはいなかつた・・・と思つ」

はつきり言つて自信がなかつた。アレだけ蹴られたら俺の記憶を疑  
つてしまつからだ。やはり単に忘れてしまつたのか?

『自信皆無なの?まあ、話を聞いた限りじゃあ、強ち嘘つて言えそ  
うも無いね』

うむ、良く分かってくれていい。長年の付き合いは伊達じやないだ  
らう。

『それで、今後はどうするの?』

『やっぱり本人に聞いた方が早いと思つ。明日にでも倉元さんに尋

ねてみる

『でもそれって今日断られたんでしょ。口に出せないような事したわけ?』

「それは断じて無い。誓つて言つが俺はそんなことはしていないぞ

事実だ。俺は腐った蜜柑なんかじゃない。それ以前に人も殴れない根性無しなのだ。

そんな俺が一体何をやらかしたと?

『ほり、自分でも気づかなくうちに爆発しちゃったとか』

「何が、爆発したんだ?』

『男の欲望』

「・・・・・

『冗談だつて。真剣に考えなくていいから』

「なんだ。冗談だつたのか』

『当たり前でしょう』

「ほつとした

全く心臓に悪い。ちょっとだけ本氣にしてしまったではないか。

今までのストレスが爆発して、彼女に・・・・・・・・・あああ

駄目だ――!!!! それ以上考えてはいけん――

俺は振りを振つて思考を追い払つ。

「それで、いつ帰つてくるんだ?』

俺は話題を変える。

『うーん、どうだろ? まあ今月中には帰つてくれると思つよ

「そんなに、大変なのか?』

『そうよー。全然休みくれないんだから。まあ後ちょっとで長期休

暇だけどね

「じゃあ、その休暇のときに学校にも行くのか？」

『そのつもりだけど。何? 来てほしくないの?』

「別にそんなことは無い。けど俺、目立つの嫌いだから

『分かってるって。ちゃんと隠すから』

「頼む」

俺は少し安堵した。俺は元来、目立つことを好まない。

だから、この姿は俺の取つてのコンプレックス。何もしていなく  
ても人にフレッシュシャーを貰えてしまうのだから。

「まあ、頑張れよ仕事」

『そつちこそ、きっと明日から大変だと思つけど頑張つてね』

「・・・・・それ言つなよ」

『あはは、『めん』『めん』』

「じゃあな、お休み」

『うん。おやすみ兄さん』

ガチャツ、と受話器を置いた瞬間そんな音がなった。

俺は首を横に回転させ、リビングに掛かっている時計を見た。

短い針は八と九の間に、長い針は五を指していた。

八時二十五分か。ふう、なんだかんだで長話になってしまった。

俺は何気なしに、まだ来たままの制服のポケットに手を突っ込む。

そのさいに、くしゃつという紙が潰れるような音と感触を俺は感じた。

？何か入っていたかな？と思つてそれを取り出してみた。

一つに折りたたんだ紙であったので、それを開いてみた。

『今日の放課後体育館裏に待っています』と書かれていた。

……。『元離婚』されていた

「な・・・んだ、これ？」

翌日。いつもどおり学校に登校した俺は、今までに無い怒りと憎悪に震えた。

昨日の写真、俺が土下座している写真がポスターふうにされて、学校中の至る所に張られていたのだ。

これを見ていた生徒が、俺がいることに気づくと、哀れんだ様子で去つていった。

きっとあいつの仕業だ。

俺は眼鏡を掛けた男のことを思い出す。

きっと俺があの負け組み愛好会つてやつに入らなかつたから、それを逆恨みしてこんなことをしたに違ひない。

「やあ、おはよー」

「・・・おまえ」

俺が内心で怒りで震えているとき、その声が俺を振り向かせた。

そこには眼鏡男こと周藤幸太が立つていた。

「そんなに恐い顔をしないでくれたまえ。あらかじめ言つておくが、これは私の仕業ではないぞ」

そいつは冷静に、そして静かに言つた。  
その事実に俺は少し驚愕する。

「見たまえ。昨日、君に見せた写真と全くアングルが違っているだろ。実はな、あの写真は他人からも貰い物でな、私はあれ一枚しか持つておらず、ネガさえない。もちろん、アレを他の人に見せた覚えもない」

それに、と周藤幸太は続ける。

その視線は目の前の写真に注がれていた。まるで親の仇を見るような眼で。

「この様な人を辱める行為など、私は心の底から嫌悪する。勝ち組負け組み云々の前にこれはクズのやることだ。一体自分が何様になつたつもりなのだ？ そうやって他人を陥れ、不幸を弄ぶ存在は永久に不滅することを

祈るよ」

俺はかなり驚いた。

こいつにはこいつの譲れない物というか、絶対に冒してはならない禁行<sup>タブ</sup>というものが存在するのだろう。

俺がこんな責めを受けられていることが、こいつにとつては許せないのだろうか。

「さてと。話が違つてくるけど、今日も君に話があつて来たのだよ

周藤幸太はポスターから視線を外して、俺に振り向いた。

その顔は昨日俺を無理やり勧誘しようとした時と同じだった。

「なんだ？ 負け組なんちらには入らないからな」

「ちちちち。流石に私もバカじやない。思つてみれば、今まで交流も無かつた赤の他人に、いきなり負け組み愛好会に入ろうなんて言つても通じるわけが無かつた。故に！」

周藤幸太は眼鏡をくいつと持ち上げた後、俺に自らの右手を差し出してきた。

「まずは友達から始めよう」

そして言つ。

俺は耳を疑つた。こいつ今なんて言つたんだ？  
友達？俺とか？納得は出来ないが理解は出来た。

要するにこいつは、俺を負け組み愛好会に入れたいがために友達になろうと言い出してきたのだ。

そこには友好を築くというわけではなく、ただそれに入れるための手段でしかないのだ。

こいつは俺をなめているのか？

「拒否する」

「ほう。何故だね？」

「今まで遠巻きに俺の事を不良ぐらいにしか見ていなかつたくせに、俺が失態を晒した直後に、友達になろう？都合が良過ぎるだろ」

正直な気持ちだった。

俺の外見が恐いってだけで距離を置いていたというのに、その正体が唯の高校生と分かるいなや、馴れ馴れしく話しかけてくるなど馬鹿にするにも程がある。

だが周藤幸太は、俺の視線を真っ直ぐに受け止めこいつ言つた。

「そのことが。今更言つといい訳染みているが、前々から君の事は気にはしていたんだ。確かに噂では人を殺しただとか、婦女子を孕ませたとか色々あつたが、そのわりには目立つた行動も無く、調べた限りでは授業も真面目に受け、成績も良く、講師に対しても謙虚

で礼儀正しい。服装も一切の乱れも無く、常に正しているようだ。

「ふう、疑問に思つたが、本当に川島駿といふ間に外見通りの人物なのだろうか? とね。そして今回の事があり合点がいつた。川島魁人はいたつて普通の高校生なのだと! ! 」

俺は再度驚愕する。

人を殺したとか、そんな事まで言われていたと聞いたのも一つの要因だが、なにより、周藤幸太という全く知らない相手が、本当の俺の事を見てくれていたという事実があつたからだ。

俺は目の前の男に付して感動してしまつた。

「そ・・・うか」

「……」なのた  
「それで、握手は入れてくれるのかな？」

周藤幸太は再度俺に向けて右手を出してきた。俺はその手を少しばかり見た後、それを握った。

「今思い出したが、君に重大で残念な話がある」「なんだ?」

トイレに行つた後、手を洗うのを忘れていた

汚ね———つ！！

俺は音速に匹敵する速さで手を離す。

「いや、失敬失敬。故意ではないのだよ、許してくれたまえ」「寄るな。近づくな。むしろ消えろ。さっきの握手は無しだ、撤回

「そう怒らないでくれたまえ。お詫びといつてはなんだが、取つて

置きの情報を複数用意してある。聞いていて損はないと思つや」

洗わなければ。さつさと洗わなければ腐つてしまつ。しかもなんか

臭い始めてきた気がする！！

内心焦つて いる俺を無視して と いうか、別に 気にして い ない 様子で

周藤幸太は情報とやらを話 し始めた。

「まずは一つ曰は、君をコテンパンにした工セ救世主こと倉元亞紀の事だ。年齢16歳、身長161センチメートル、体重は乙女の事情によりノーロメント、スリーサイズは上から・・・・・・・・・・これも乙女の事情によりノーロメントにさせて頂く。ココに転校する前は聖華大学付属女子高等学校に在籍。親の転勤または赴任や、不祥事による退学なども無し。それにより転校理由は不明。ついでに言うと君との接点も不明だ。何か質問は？」

「無し。というかどうからそんな情報を手に入れたんだ？」

「秘密だ。それと、君を絞めたという事で学校ではもはや英雄扱いだ。ファンクラブまで作られているらしい。彼女の存在は学校中に認知されているほど有名となつて いる」

周藤幸太は眼鏡を中指で持ち上げる

「情報その一。このポスターを貼りまわした犯人についてだが、正確には掴めなかつた。だが、三名にまで絞り込む事ができた。一年A組東野美香、同じく一年F組豊田久、それと三年G組の富岡俊吾、以上三名だ。彼らに心当たりはあるかな？」

どれも始めて聞いた名前ばかりだ。

俺には全くの心当たりは無い。

周藤幸太はあごに手をやり何やら考え込んだ。

「そりゃ。なら仕方ないな。地道に調べるとしよう」

真剣に考えているところを見ると、ここつは犯人を見つけるつもりなのか？自分の事でもないのに・・・。

「我らは友なのだ。友が困っているとこいつに黙つてみているわけにはいかんだろう」

と、臭い台詞を吐かれた。  
なんとも、むずかしい。

「む、もうすぐホームルームが始まるな。さうばだ友よ。また空いた時間に教室に寄らせてもらおう……」

「あ・・・ああ」

言いながら周藤幸太は自らの教室へ駆けて行つた。  
それにしても。

「友達・・・・・か」

なんとも言えない嬉しさが俺の心に残つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3251d/>

---

～ランダム～

2010年10月12日02時19分発行